

平成17年度学芸員等在外派遣研修実施報告書

1 研修テーマ

「日本と欧米における個人作家的活動とその工芸的概念について」

2 研修期間

平成17年11月20日～平成18年3月23日

3 研修概要

(1) 研修先の名称

ビクトリア・アンド・アルバート美術館 (Victoria and Albert Museum)

(2) 研修の内容

V&A 美術館でイギリスを中心として近・現代において個人作家的活動を展開した作家について、その作品及び文献を通して調査・研究を行った。また、ロンドン及びその周辺にある美術館や博物館、ギャラリーを訪ね、その活動の歴史の成り立ちや他の分野の美術との関係を、実際の作品を通して調査・勉強を行った。さらには、現在活躍中の作家を訪ね、直接話を聞くとともに、工房を見学してもらい、作品が生み出される思考や環境の調査を行った。

加えて、イギリスの代表的な教育機関であるロイヤル・カレッジ・オブ・アート (RCA) において、制作のコンセプトや考え方、実際の指導現場を見せてもらい、その概念の成り立ちについても調査・勉強を行った。

ア ビクトリア・アンド・アルバート美術館 (V&A 美術館)



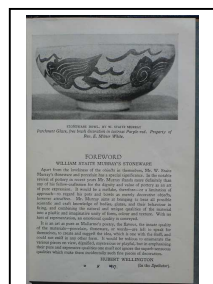
外観



陶芸展示室



ガラス展示室



NAL 文献

V&A 美術館は、イギリスをはじめヨーロッパの工芸の中心的な美術館であり、近・現代の工芸の所蔵作品も多い。今回の研修のメインであった陶芸展示室は改装準備のため閉室していたが、研修ということで、数日にわたりイギリスを中心に、主にヨーロッパの陶芸作品の調査を行った。また、陶芸作品以外にも、ガラス、染織、金工などの作品の調査を行い、同時代の工芸作品の多様な展開を調査した。

加えて、日本ではほとんど見ることのできない近代以前のヨーロッパ陶磁器の変遷を、実際の製品を通して確認し、近・現代作家への影響などについても調査を行った。

V&A 美術館には、イギリスをはじめ欧米の美術・工芸に関する文献資料を集めたナショナル・アート・ライブラリー (NAL) があり、作家及び作品調査と並行して、入手可能な文献資料の収集にも努めた。とくに、職人から作家へと移行する過渡期の工芸作家の展覧会記録を集め、その時代にどのような意識の変化があったのか、また、美術と工芸の関係などについて調べを行った。

イ ロンドン市内における作家および作品の調査



コンテンポラリー・アプライド・アーツ



ギャラリー・ベッソン



バレッタ・マースデン・ギャラリー



フロウ・ギャラリー

ロンドン市内には、工芸を専門に扱うギャラリーが多く、イギリスのみならずヨーロッパの動向にも敏感に反応しながら作家を紹介しており、それぞれのギャラリーを巡るだけでも現況が把握できる。とくに美術館の所蔵作品に比べ、評価が定まっていない新進作家の作品を観ることができるため、時間をつくってはギャラリーを巡り現代作家の調査を行った。頻繁に通うことで、作家や作品が見えてきて、日本の若手作家との比較などにも大いに役立った。

コンテンポラリー・アプライド・アーツでは、さまざまな工芸素材を扱う作家の作品を紹介している。作家の意識に加え、ギャラリー側の意識も把握でき、イギリスにおける工芸がどのような位置づけにあるのかが端的に理解でき、日本との類似や相違などを知る手掛かりを少しではあるが得ることができた。また、美術館や大学の研究者による企画展示なども積極的に行っており、イギリスにおける工芸の最先端の作品を観ることができ、研究者がどのような作品を工芸と認識し、展示紹介を行っているのか、その一端を知ることができた。

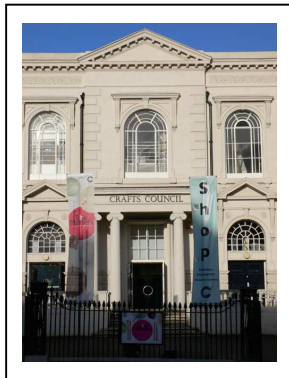
ギャラリー・ベッソンは、イギリス陶芸界に多くの作家を輩出してきた老舗のギャラリーである。オーナーであるベッソン氏は世界的に知られ、イギリスを代表する陶芸家、ルーシー・リーやハンス・コパーのコレクターとしても著名で、重要な作品を所蔵している。

ギャラリーとしては陶芸を中心に、最近ではヨーロッパ全域の作家の作品を紹介している。近年は、欧米の新進作家の紹介に加え、日本の若手作家の紹介にも熱心で、イギリスと日本の陶芸の文化的交流も行っている。ここではある程度評価が定まりながら、美術館等で紹介されない作家とその作品の調査を行った。

バレッタ・マースデン・ギャラリーでは、企画展に加え、常設展が充実しており、小さな美術館なみの充実度であった。企画展の初日には作家をはじめ研究者が多数訪れ、活発な意見交換が行われる。作品のコレクションは、陶芸、ガラス、金工、木工など各分野の工芸的な作品展開を行っている作家の作品を収集しており、この研修ではとくに常設展で紹介されている作家及び作品の調査を行った。このギャラリーはアート・フェアにも積極的に参加しており、その役割は大きく、工芸界の形成に一役買っており、今回の研修目的に沿う調査や勉強ができた。

フロウ・ギャラリーは、陶芸、ガラス、金属、ジュエリーを主に扱っているギャラリーで、ただ作品を並べるだけでなく、作家に対して積極的に実験的な試みを促し、展示紹介を行っている。たまたま研修中にはイギリスと日本の陶芸家の交流作品展が行われていたが、素材を限定することで、日ごろ使っていない素材に対する新鮮なアプローチを示した作品に出会うことができ、作家の違った一面を知ることができた。

ウ クラフツ・カウンシル



ギャラリー（企画展示室）

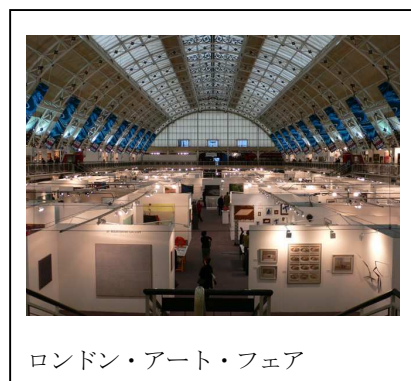


常設展示室（金工展）

クラフツ・カウンシルは、イギリスの工芸に関する情報発信施設としての役割を担っている。1階にはギャラリーがあり、クラフツ・カウンシルやゲスト・キュレーターが企画した展覧会などを開催している。研修中は改装の期間とぶつかり、ひとつの展覧会しか観ることができなかったが、ゲスト・キュレーターによるクラフト系の企画展は新鮮な印象であった。その展覧会に関しては後日、RCAで教鞭を執るアリソン・ブリトン氏と話す機会があり、意見交換を行うことができた。

2階には所蔵作品による常設展が行われており、展示だけでなく素材を触るコーナーもある。また、作家の資料を提供するインターネットに接続したパソコンや資料室、美術館やギャラリーの情報スペースがあり、ここに来れば最新の情報が手に入るようになっている。工芸に関する書籍については1階のギャラリー横のショップで販売も行っており、各工芸について作家やその素材の専門的な書籍が入手できる。新刊に加えバックナンバーも置いており、その充実度は市内にある本屋以上であった。ここでは主にイギリスにおける工芸作家や個展の情報を集めた。日本にもこのような施設があれば、もっと工芸が理解され周知されるのではと思った。

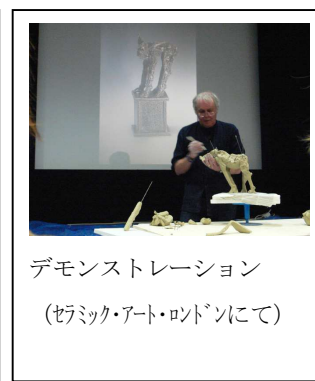
エ アート・フェア、工芸フェア



ロンドン・アート・フェア



コレクト (工芸フェア)



デモンストレーション
(セラミック・アート・ロンドンにて)

研修中、大規模なアート・フェアが4回、小規模なものを入れると6回ほどが主にロンドン市内で開催された。アート・フェアはギャラリーが作家や作品を紹介し商売を行う場であるが、いろいろな作品を一堂に、それも各ギャラリーが持ち寄る作家の最新作を観ることができる。また、各ギャラリーにおける美術あるいは工芸についての意識度にも触れることができる。「ロンドン・アート・フェア」では工芸作品はほとんど扱われていないが、作品が良ければ美術も工芸もないという傾向が垣間見られた。ギャラリーによっては絵画や彫刻の間の空間を埋める調度品のような意識で工芸を並べているところもあった。ここでは作家を取りまく環境や作品を制作する環境がどういったものかを知る手掛かりを一部ではあるが得た。

「コレクト」は年に一度、V&A 美術館の企画展示室を使って行われる大規模な工芸フェアである。イギリスをはじめ、ヨーロッパやアメリカ、アジアのギャラリーが世界中の作家とその作品を紹介し、工芸関係者のお祭りのような印象であった。日本ではほとんど紹介されない作家の作品を数多く観ることができ、日本で知られている作家がほんの極一部であることをあらためて知った。この工芸フェアでは、ギャラリーのブースを観てまわるだけでなく、作家のデモンストレーションや研究者のレクチャー、シンポジウムなどのプログラムが用意されており、それらに参加することができる。最新の研究状況を知ることができるこれらのプログラムへの参加は書籍からでは得られない大きな成果であった。

また陶芸では、RCAのギャラリーで開催された「セラミック・アート・ロンドン」が充実した内容で調査・研究に大いに役立った。主にロンドンを活動の拠点におく陶芸家によるフェアで、大学を卒業したばかりの若手から美術館や書籍で紹介されている中堅まで、多くの作家が参加し、作品の発表を行っていた。このフェアでも研修プログラムが用意されており、作家によるデモンストレーションやスライドレクチャー、記録フィルムの上映などが毎日、一日中行われていた。また関連書籍の販売などもあり、いながらにして多くの情報が得られるようになっていた。カレッジのギャラリーということもあり、多くの学生が会場やプログラムの手伝いを行っており、またその一角では学生の選抜展も開催されて、作家との交流も行われていた。工芸の中でも



学生選抜展

陶芸を中心に調査を行ってきたこともあり、作品の充実に加え、研修プログラムの充実、さらには交流の場に参加できたことは研修に大いに役に立つとともに、新たな出会いをもつかった。

オ アリソン・ブリトン氏とマーティン・スミス氏



アリソン・ブリトンの作品



マーティン・スミスと作品

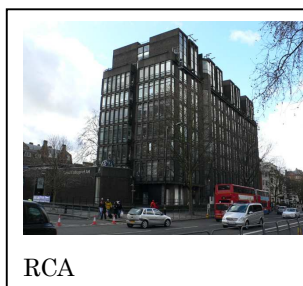
イギリスでは作品を制作しながら評論活動を行う工芸家が多く、その先駆的な動きを示したのがアリソン・ブリトン氏である。今回、この研修中に何度か論客として知られるアリソン氏と話す機会を持ち、自宅のアトリエや書斎でイギリスの工芸の歴史と現状を教示していただいた。作家として、また評論家として、両方の立場からの貴重な話しを聞くことができた。

また、RCA で長年教鞭を執るマーティン・スミス氏にも話しを伺った。マーティン氏はちょうど個展用の作品の制作中で、そのプロセスを通して自身の考え方や陶芸の在り方などについて話しを聞くことができた。

作品に対して両極の意見を持つ二人の話しを聞いたことはイギリスをはじめヨーロッパの工芸（陶芸）を理解する上で実に参考となった。

（「[在外研修報告] イギリスでの研修報告—近・現代陶芸における個人作家的活動を軸として—」『現代の眼』558、東京国立近代美術館を参照。）

カ ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（RCA）



RCA



石膏型成形室



轆轤室



釉薬調合室

先のマーティン氏、アリソン氏のご厚意により RCA の陶芸・ガラス専攻科を訪ねた。そのきっかけは、アリソン氏と話した際に、イギリスにおける工芸概念の構築を生む手がかりがRCAの見学で得られるのではないかと考えたからである。それを第一の目的とし、さらには、指導を受けた学生たちが、どのようにして自身の想いやコンセプトを作品で表現していくかを見せていただいた。RCAのこのコースでは教育者からの一方的な要求ではなく、マーティン氏やアリソン氏と学生が密接な繋がりを持ち、学生一人一人の個性に応じたきめ細かな意見交換を行い、それをもとにコンセプトを構築し、素材や技法から生み

出される工芸としての形やスタイルを強く意識させていた。その意識面において非常に羨ましい環境の中での作品制作は、時に理論武装に陥りやすいが、制作者が同時に評論活動を行うという日本にはない姿が理解できた。

(3) 研修の成果

歴史とともに現状を調査し、また、教育の現場を調査したことから、日本との相違やその影響関係などが、文献だけの勉強よりもはっきりと見えてきた。また、現地で生活することで、短期滞在では得られにくい、環境や歴史が作家やその作品形成にどのような影響を与えているのかが見え、今後の研究や発想にとっても重要なヒントをもらった。とくに最新の情報を見続けることができた貴重な経験は、過去から未来への流れを理解し、かつ、想像する力に大いに役立つと考えられる。(個々の調査や取材については、(2)研修の内容を参照)

(4) 研修成果の活用計画

東京国立近代美術館の機関誌『現代の眼』558号、2006年6-7月号に「[在外研修報告] イギリスでの研修報告—近・現代陶芸における個人作家的活動を軸として—」を掲載した(文末に掲載)。また、私が研究発表の場としている東洋陶磁学会において、「イギリスの近・現代陶芸」と題して、陶芸の歴史と現状を、この研修で得られた情報をもとに発表した。発表では取材で得た作家や作品の写真、文献資料などを画像を交えて紹介し、日本で知られているようで、実はあまり知られていない近代から現代にかけての個人作家の誕生時代の状況を解説した。

近年、イギリスにおいて、個人作家的活動の先駆的な立場を示したバーナード・リーチや、それに続くルーシー・リーやハンス・コパーの再検証が盛んに行われており、リーチに関しては書籍の発刊が相次いでいる。将来的には、研修で得られた成果をさらに発展させて、勤務先である東京国立近代美術館工芸館においてイギリス工芸に関する展覧会を開催したいと考えている。

【参考資料】

「[在外研修報告] イギリスでの研修報告—近・現代陶芸における個人作家的活動を軸として—」

2005年11月20日から2006年3月23日までの4ヶ月間、文部科学省の平成17年度学芸員在外派遣によりイギリス・ロンドンに滞在した。研修の目的は、イギリス工芸における個人作家的活動とその工芸的概念についての調査・研究であり、とくに日本で情報の少ない活動の黎明期に活躍した作家および作品の把握と今日の状況の調査を重点においた。加えて、日本と欧米、とりわけイギリスにおける活動を比較して、それぞれの工芸的概念を美術の動向や時代ごとに浮かび上がる思考と照らし合わせながら検証し、今後の工芸の在り方や表現の可能性についても探ってみようと考えた。

研修先はロンドンの中心部よりやや西に位置するサウスケンジントンにあるヴィクトリ

ア&アルバート美術館（V&A 美術館）で、展示室や展示点数、スタッフ数など、日本の美術館・博物館と比較にならないくらいに大きな組織である。とくに工芸のコレクションは、イギリス中世期から近・現代までと幅広く、作品の素材の種類においても、また収集の地域においてもヨーロッパだけでなく中近東から極東まで広がりを持っており、それぞれを比較検討するには極めて都合がいい。現代の作品や資料においては収集が本格的に始まったところで、今後に期待するが、近・現代の工芸研究においては優れた研究者が数多く在籍し、その研究および情報の発信地として世界における地位はゆるぎないものがある。

さて、私はこの V&A 美術館で、イギリスにおける工芸の歴史、とりわけ 1850 年以降の陶芸についての調査を行うことから始めた。膨大な工芸資料と作品を前に、最初はどこからどのようにして手をつけ、調査を行ってよいのかとまどったが、自分の専門である陶芸に的を絞ることで、歴史的な流れや作家の動向を掴み、その後そこを出発点として徐々に素材に広がりを持たせながら調査を行うことにした。ここでの調査は、個人作家と呼ばれる制作者が現れてくる前から、活動や思考の萌芽が始まり少しずつ活動が見られるようになる頃までを重点に置いた。しかし調査を行ってみると、多くの作品や製品の端々から古陶磁の姿が見え隠れし、日本におけるこの時代の作品と類似するところが見えてきたため、日本の近・現代陶芸を考える時と同様に、さらに時代を遡ってそれらの原点になったと思われる古い時代の資料までを知る必要が出てきた。でもそこは世界有数の工芸美術館である V&A 美術館の利点を生かして、14 世紀ごろまで時代を遡り資料を見比べながら調査することができ、書物や写真などの二次資料で比較するよりもはるかに有意義なものとなった。

この黎明期における日本での情報は極めて限られており、日本で知り得た知識では全くと言っていいほど役に立たないことが度々であった。日本にはごく限られた作家、例えばバーナード・リーチやそれを取り巻く作家の名前しか伝わっていないし、また、伝わっていたとしても一人の作家がつくり出した作品の情報のほとんどは限定されており、固定したイメージが植えつけられていることがよくわかった。名前の知らない作家や知っていてもほとんど生没年だけしかわからない作家に関しては、V&A 美術館内にあるナショナル・アート・ライブラリー（NAL）で文献による調査を行い、情報の収集に努めた。結局は一から情報を収集することで、作家や作品について限られた数ではあったが把握することができ、これにより黎明期における作家の動向やその広がりが少しずつ見えてくるようになり、今後の研究の上で非常に助けとなった。美術館・博物館における資料の収集および保管、情報の提供においては、作品などの資料だけ、あるいは文献だけではごく限られた内容しか伝えられないということが、自身が経験することであらためて理解できたこともよい経験となった。

ところで、V&A 美術館のセラミック・ギャラリーにおける展示は、一時代前によく見かけた、膨大な資料を時代順にただ見せるというものに近いところがある。地域や時代に広がりを持つ豊富な資料とともに広い展示空間が、かえって仇となり、最新の研究や情報を即座に展示内容に反映させることが難しいようだ。また、専門分野が細かく分けられているため、同じ素材であっても時代や地域が変わることで担当も変わり、そのボーダーをなかなか超えられないのが現状のようだ。しかしながら、近年の工芸をめぐる研究活動を見ていると、日本のみならずヨーロッパにおいてもその造形の特質にあらためてスポットがあたり、今後ますます研究が活発になることが予想される。世界に冠たる施設として、

展示の改善とともに、作品資料のより有意義な活用を考えてほしいと思われた。

私の調査は V&A 美術館だけでなく、とくにロンドンにあるギャラリーを巡って最新の動向を見聞したり、工芸家を育てる教育機関を訪ねて指導者に意見を聞いたりして、現況の調査も並行して行った。ギャラリーでは作家の個展やグループ展を中心に、ギャラリーが所有する現代工芸のコレクションも併せて見せてもらい、作家の把握や近年の作品の傾向などを調べた。一方の教育機関では、V&A 美術館からほど近い、ロイヤル・カレッジ・オブ・アート (RCA) の陶芸・ガラス専攻科において、長く後進を指導しているアリソン・ブリトンとマーティン・スミスに何度か会い、工芸や教育に関する話をうかがった。時に自宅や工房を訪ねて、その生活や環境を見せてもらうことで、それぞれの考え方や作品の理解を深めるきっかけを掴もうとした。教育機関を訪ねたきっかけは、イギリスにおける工芸概念の構築を生む手がかりを得ることを第一に、さらには、指導を受けた学生たちが、どのようにして自身の想いやコンセプトを作品で表現していくかを見たいと思ったからである。とくに指導者の一人であるアリソンは論客としても知られており、その指導方法には興味があった。ここでの指導は教育者からの一方的な要求ではなく、アリソンと学生が密接な繋がりを持ち、学生一人一人の個性に応じたきめ細かなものであった。そして、度重なる意見交換のもとにコンセプトを構築し、その中で素材や技法から生み出される工芸としての形やスタイルを強く意識させていた。その意識面において非常に羨ましい環境の中での作品制作は、時に理論武装に陥りやすいが、それにもまして学生は、常に思考し続けることの大切さを強く深く理解することになると感じられた。

興味深いことに、アリソン・ブリトンとマーティン・スミスは、まったく正反対の意識を持って作品を生み出しており、それはそのまま指導においても違いが見られる。アリソンは、つくりながらイメージを膨らませ、形が最初の段階から大きく変わったとしても素材の声を聞きながら、またその時々気持ちを大切にしながら作品を生み出すという方法をとっている。一方のマーティンは、制作が始まる前にコンセプトをしっかりと構築し、完成形を常に意識して作品を生み出すという方法をとる。その違いはそれぞれの作品にも顕著に表れている。アリソンは、粘土を布状に薄く大きく伸ばし、それを立ち上げながら形をつくる。その時、土の軟らかさ、シャープさなど、素材と形を呼応させるようにしながら、時にそれはハイブリッドという意識のもとに、二つの相反するテーマを一つの作品に共有させる。一方のマーティンは、デザイナーが形をつくり出すように平面で形やラインを決定し、型や型紙を用いてスケッチと寸分違わぬ形をつくり出す。そこには、成形や焼成における偶然は一切排除され、必然のみで生まれた作品がつくり出される。土の素材感は作品の姿や形よりも表面においてのみ生かされ、その質感を保つのである。この二人の制作スタイルは工芸においていかにも両極であるが、実は多くの場合、工芸家が作品を生み出す際に用いる方法論を顕著に映し出しているのである。

今回の研修では多くのことを見て、さまざまなことを考えるきっかけを自身にもたらした。日本の尺度しか持たない自分にとって、この新たな出会いは、工芸的な造形の成り立ちや今後の工芸の在り方を、より広い視野から考察する術をあたえてくれることになるだろう。

(『現代の眼』558 2006年6-7月号、東京国立近代美術館、2006年6月)